

常陸大宮市の城跡調査①

－向ノ入館跡－

古代・中世史部会では現在、市内の城跡を調査しています。城跡と言っても、探しているのは、石垣や天守閣を備えた江戸時代の城の跡ではなく、空堀と土塁により守られる土づくりの城の痕跡です。出城やのろし台のような簡素なものも含めると、市内には60か所以上もの城跡が残ります。近年では、民間の研究者により多くの城跡が新たに発見され、また、高部城跡や河内城跡（ともに美和地域）等の一部の城跡では、市民団体による調査・整備事業も進められています。これらの成果は、今後の市史編さん事業で取り上げていきたいと思っています。

ところで、城跡の調査では、地面の凹凸を観察して縄張図という図面を作り、研究や遺構の保存に役立てます。今回は、城郭研究者の五十嵐雄大さんが去年発見した、向ノ入館跡について、私が描いた縄張図を基に紹介します（図1）。

向ノ入館跡は、大字北塩子地内、常陸大宮市文書館の南東の山上に所在します。山頂の曲輪（防御された平地）を中心に、土塁や堀切などの防御施設が城を守ります。

この城の注目すべき点は、城内を古道が通っている点です（図1内破線部）。

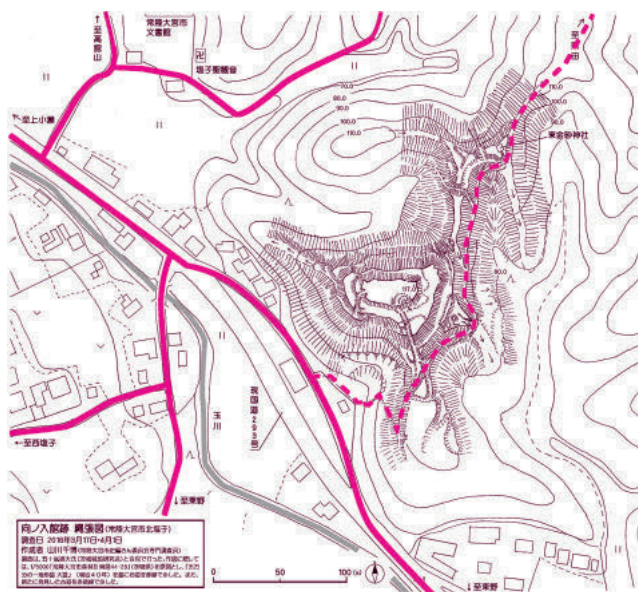


図1 向ノ入館跡の縄張図



古代・中世史部会専門調査員 山川 千博
(大田原市教育委員会 文化振興課 市史編さん係)

この古道は、西塩子方面から東進してくる道の延長線上にあたり、城内を通り、東金砂神社の分霊を祀る社を経由して北東の照田方面へと抜ける、「照田街道」と呼ばれる道（坏夏男『塩子観音縁起』1986年）の一部だと思われます。

この古道の発見により、同一の道筋上に西塩子館跡・上小屋館跡・向ノ入館跡・羽黒山館跡等の多くの城跡が並ぶことがわかり（図2）、今まで注目されていなかった東西の道が、実は重要な道である可能性が浮上しました。とくに上小屋館跡と向ノ入館跡との間は、照田街道と、東野方面から上小瀬・高館山方面へと抜ける南北道（概ね現国道293号）との交差点にあたるため、向ノ入館跡の交通上の重要性がうかがわれます。

今後市史編さんを通じて、市内の知られざる城跡を少しずつ紹介したいと思います。もし皆さんがお住まいの地域に、未発見のお城に関する情報があれば、ぜひご一報ください。

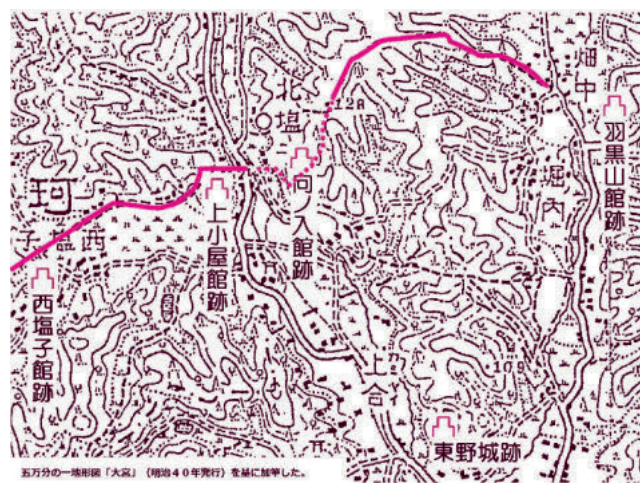


図2 照田街道と沿道の城跡

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）